

観光振興による地域活性化を目的とした
住民ワークショップ形態に関する考察

増尾 歩 植杉 大

A Study of the Residents' Workshops for Regional Vitalization
by a Tourism Promotion

Ayumu Masuo Dai Uesugi

2018.3

『摂南経済研究』第8巻 第1・2号 別刷
摂南大学経済学部

論文

観光振興による地域活性化を目的とした
住民ワークショップ形態に関する考察

増尾 歩¹ 植杉 大²

A Study of the Residents' Workshops for Regional Vitalization
by a Tourism Promotion

Ayumu Masuo

Dai Uesugi

【要 旨】

本論文では、観光振興による持続的な地域活性化を実現するために必要な地元の地域観光事業者及び地域住民の理解・協力を得るため、さらに観光に必要な地域外部者の視点を加えるために、従来の利害関係者のみで実施される住民ワークショップの枠を超えて、地域連携する大学の学生を加えた「拡大住民ワークショップ」の実施報告、及びその効果を検討、考察した。結果として、そのような住民ワークショップは、住民の観光施策への積極的な理解を誘発させ、住民同士や観光事業者同士の相互理解を深めることが確認された。特に外部者たる大学生の参加により、地域住民の地元に対する新たな気づきをもたらし、行政の観光施策への理解や積極性を誘発させる点については、従来の利害関係者のみのWSと一線を画する性質をもつもの考えられる。

¹ 摂南大学大学院経済経営研究科

² 摂南大学経済学部

1. はじめに

本論文は、観光を通じた地域活性化を実現する具体的方策として、特に住民ワークショップ(以下、住民WS)に関する考察を行うことを目的としている。

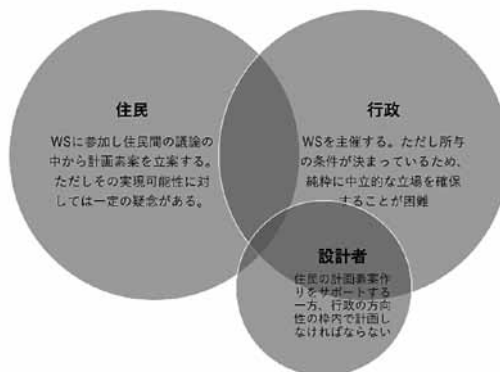
2015年10月末に全国の自治体により「地方版総合戦略」の策定が行われ、それ以降各自治体のホームページ等でもその内容を確認することができる。概ね現在の地方創生の流れを受けて、その政策に観光振興を通じた地域活性化を掲げる自治体は多い。しかしそれはあくまでも行政主導で作成された、今後の大まかな地域経済活性化の方向性を示すものである。もし具体的な施策が決まっていたとしても、行政からのトップダウンな政策であることで、地域観光事業主体や地域住民に対してその意図や方向性が十分に浸透、理解された上で実施されているとはいいたいがたいのが現状ではないだろうか。政策を実施する行政側としても、地域観光事業主体の積極的な活動や地域住民の協力的な姿勢なくしては、策定した政策方向性も「絵に描いた餅」になりかねない。

このような観光に係る各地域主体の積極的関わりを引き出す方法として、住民WSが位置付けられよう。

一般的に、地域問題に対する総合的な計画を住民参加によって作成する方法は、住民WS、住民アンケート、審議会における住民委員の公募、パブリックコメントの公募、住民委員会の設立と提言などがあり、これら単体あるいはこれらの組み合わせにより作成されている。

特に住民WSについては、都市再開発やまちづくり、防災、震災復興まちづくり、地域コミュニティ施設をはじめとした公共施設建設や整備など、都市計画に係る問題に関して「直接」利害関係を持つ住民が参加する住民WSに関する研究はこれまで多数報告されている。このような場合、図1のような住民WS参加者の役割構成が一般的であろう。

図1 住民WS参加者の役割構成



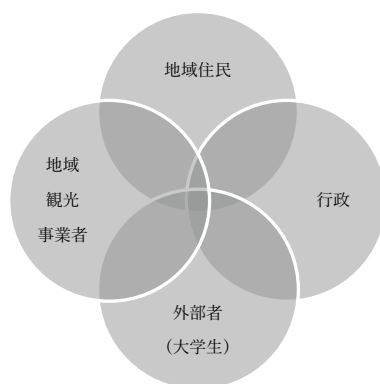
このような都市計画に関する「直接」利害関係を持つ地域主体が参加する住民WSについて、合意形成の場としてその有効性が多くの研究により検証されている。例えば、都市再開発やまちづくりについては錦澤・米野・原科(2000)が挙げられる。防災計画については、平田(2011)、金・吉田・大窪・林(2015)、宮田・大窪・金・林(2016)が挙げられる。震災復興まちづく

りについては、園田・坂本・石川（2013）が挙げられる。地域コミュニティ施設については、平山・趙（2013）が挙げられる。その他、まちづくり支援と地域情報整備という観点から、原・稲葉・横山・本迫・巖（2008）が挙げられる。これらの先行研究で共通してみられる主張は、住民WSを実施することで地域での住民の対象問題に対する積極的な意識変化、及び連帯感の醸成等である。

それでは、このような都市計画を中心に置いた住民WSと比較して、先述した観光振興による地域振興を目的とした住民WSとは何が違うのだろうか。前者の場合、その地域に「直接」利害関係を持つ地域住民の参加により実質的な意味を持つものであり、行政に課された所与の条件の範囲内で地域住民がWS内で創造性を発揮することで、よりよい地域づくりと住民同士の理解、協働意識の醸成がなされるところに本質的な意義があると考えられる。一方、観光振興による地域振興を目的とした住民WSの場合、「直接」の利害関係者は地域の観光事業者であるが、地域への観光客の入込によって地域住民にも「間接」的に利害関係が及ぶ。何よりも観光客という「地域外」の主体の動向により、その影響も大きく変化する。したがって、「直接」利害関係を持つ主体だけで構成される住民WSでは、その意義は自ずと限定的とならざるを得ないと考えられる。

そこで本論文では、図2で示したように、従来的には「直接」利害関係をもつ地域主体（地域住民）だけで構成されるような住民WSの枠組みを超えて、地域における観光振興に「直接的に係る主体（地域観光事業者）」、「間接」的にも関わる主体（地域住民及び行政）、さらには「直接・間接」的にも関わらない主体（外部者としての大学生）で構成される「新たな・開かれた」住民WSの形態を提案し、その効果を考察することを目的としている。

図2 観光振興に関する住民WSの参加者



本論文の構成は以下のとおりである。第2節では、2016年から2017年にかけて住民WSを実施した和歌山県日高郡由良町に関する概略と、住民WS実施に至る経緯について説明する。第3節では、実施した住民WSに関する詳細について説明する。第4節では、簡単な考察を行い、第5節でまとめを示す。

2. 住民 WS の概要

2.1. 由良町の概要

和歌山県日高郡由良町は、和歌山県の沿岸中央部に位置する町である。人口は2017年11月現在で、総人口5,969人、総世帯数2,736世帯である。国立社会保障・人口問題研究所の2015年における推計によれば、年少人口・生産年齢人口・老年人口の比率は、それぞれ11%、55%、34%である。将来的な推計によれば、年少人口・生産年齢人口は減少し、老年人口が2040年には45%まで上昇するとされる、典型的な地方地域である。

由良町の基幹的産業は、製造業としては、大型船舶の修理、小型船舶の製作、橋梁・鉄骨等の鉄鋼構造物の製作が挙げられる。また、域内には白崎海洋公園、興国寺といった景勝地が存在しているため、民宿・旅館といった観光も重要な産業である。さらに、ミカンを中心とした柑橘系の果樹栽培及び漁業も主要産業である。

由良町では2015年末に、住民代表、議会、学識経験者及び各種団体等から組織する「由良町まち・ひと・しごと創生推進協議会」で審議を経て、「由良町人口ビジョン」及び「由良町総合戦略」を策定した。総合戦略の基本目標としては、①由良町における安定した雇用の創出する、②由良町への新しいひとの流れをつくる、③由良町の若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる、由良町の時代に合った地域をつくり、安全な暮らしを守るとともに、地域と地域を連携する、といった目標が掲げられている。

産業面に着目すれば、基本目標①において、地場産業の担い手の確保や後継者不足の解消、若年層の就業機会の確保、新たなブランドや産業の創出に取り組むとされており、平成31年度までに50人の新たな雇用の創出を目標としている。具体的には、平成26年度から5年間のKPI設定として、町内新規就農・起業者数を4人から10人まで増加させる、ブランド商品の開発件数を0件から3件まで増加させる、サテライトオフィス・スクールの貸出団体数を0件から5件まで増加させるとしている。また、基本目標②において、観光資源を使った誘客の促進、空き家・空き店舗等の有効活用による移住施策、さらに、和歌山県の大学のふるさと事業を活用し新しいひとの流れをつくとされており、平成26年度のマイナス114人の人口の社会(増)減を半減させることを目標としている。具体的には、平成26年度から5年間のKPI設定として、観光客入込総数を231,524人から280,000人まで増加させる、空き家等の有効活用件数を0件から10件まで増加させる、U・Iターン者数を0人から30人に増加させるとしている。

以上を概観すると、新規の企業誘致が困難であることから、地域ブランドの確立、観光産業振興及び空き家等の有効活用を通じて人口の社会減に歯止めをかけようという方向性が理解できる。特に観光産業振興については、関西国際空港から車で約1時間、また、大阪の中心地から約2時間という立地条件であるため、邦人観光客及びインバウンドの誘致にも積極的に取り組むとされている。しかし大阪などの大都市に近いにもかかわらず宿泊客数が少なく、小規模の旅館や民宿などの宿泊施設しかないため、入込観光客数に対して滞在を通して地域において消費を行う宿泊客数は低位横ばいが続いている。

由良町の観光資源としては、前述した白崎海洋公園や興国寺といった景勝地が代表的である。

白崎海洋公園は「日本の渚100選」にも選ばれた景勝地であり、公園内にはダイビングを行える施設がある。興国寺は醤油発祥の地とされ、尺八や虚無僧といったオリエンタリズムを強く感じられるものの発祥地でもある。アクティビティの充実や歴史及び地域性を強調することに成功したならば、必ずしも観光コンテンツの少ない地域ではない。

2.2. 大学連携と学生の研究活動

由良町をフィールドとして、2015年以降、地域観光振興に関する取り組み方法について研究を継続している。

2015年には、増加するインバウンドを観光誘致する方法として、着地型観光の形態として、オプションツアーの利活用を提案した。前述したように、由良町は関西国際空港からのアクセスも良く、大阪中心部までバスで2時間程度と、気軽に立ち寄れるロケーションにある。したがって、宿泊とまではいかなくとも日帰り観光地として認知度を高める方法を模索した結果、白崎海洋公園という景勝地におけるアクティビティとしてセグウェイの導入と地引網体験、醤油発祥地という日本文化・歴史に係る学習体験などのコンテンツを提案し、その実現可能性について検討した。

また2016年には、地域における宿泊客や宿泊施設の少なさに着目し、近年注目されている宿泊形態であるグランピングを導入することを提案した。グランピングは豪華なという意味合いの「グラマラス」とカジュアルな宿泊スタイルである「キャンピング」をかけた造語であり、自然を直に感じられるキャンプにホテル宿泊の便利さや豪華さを兼ね備えた宿泊形態として近年施設数が増加している。景勝地である白崎海洋公園には、すでにトレーラーハウスなど簡易宿泊施設は完備されており、バーベキューを行う施設も存在するため、比較的成本をかけずに導入が可能ではないかという提案を行った。また、資金調達には、クラウドファンディングを利用するなど、行政主導ではなく民間主導のスキームの提案について、その実現可能性について検討を行った。

2016年秋から冬にかけて、由良町観光協会の企画事業として、実験的にタクシーツアーのモニターツアーに学生が参加した。これまで観光客からは、由良町内は交通の便があまりよくないため改善を求める声が多く聞かれたという。そこで、定額のタクシーツアーにオプションで語り部を同行させることで、由良町の歴史について学習することをメインコンテンツにしたツアーを企画し、そのモニターとして学生数名が参加した。

以上のように由良町では、学生からの提案あるいは地元からの提案など、内外から観光振興アイデアを積極的に取り入れつつある。これらはいずれも、由良町役場組織の中で、由良町役場産業建設課及び総務政策課を中心として政策展開されている。しかし、もし具体的な施策が決まっていたとしても、地域観光事業主体や地域住民に対して、その意図や方向性が十分に浸透、理解された上で実施される必要がある。政策を実施する行政側としても、地域観光事業主体の積極的な活動や地域住民の協力的な姿勢なくしては、策定した政策方向性も「絵に描いた餅」になりかねない。つまり、行政が中心となって観光振興させるといえば「トップダウン」的な方向性で進めるだけではなく、地域観光事業主体や地域住民からの「ボトムアップ」

的な方向性も考慮して観光振興策を考えなければならないということである。

また観光振興の性質から考えると、地域内の視点のみでは観光客の需要の取り込みに関して不十分なのではないだろうか。当然のことながら観光客は地域外部の人間である。地域内部の人間が考えた観光コンテンツに対して、必ずしも地域外部の人間も魅力的なものと感じるかは不明である。むしろよく言われるように、地域おこしには「よその・わかもの・ばかもの」の視点が重要だとも指摘されている。

以上のことから、地域住民や地域観光事業者のみならず、外部の視点を導入することが観光振興に関する住民WSに必要ではないだろうか。これを検証するために、2016年夏から冬にかけて計3回、加えて2017年夏に1回行われた「由良町観光住民ワークショップ」を実施した。参加主体は、上記条件から、地域観光事業者、一般の地域住民、行政、大学生（摂南大学経済学部2年生）とした。

それでは次節で、その詳細について説明を行う。

3. 由良町でのワークショップ

由良町で学生による住民ワークショップに関して、事前準備の段階から説明していく。

ワークショップによって、地域住民自らアイデアを考え出し、地域にとって有効な振興策を練り上げ、地域全体で取り組むための合意形成をしていくことが目的である。そのために、参考文献にならって、次のステップで合計4回のワークショップを進めていく。

ステップ	作業・目的
①事前調査	学生による「観光資源地図」の作成 地域外の視点で魅力的に感じる地域資源を住民と共有
②課題の明確化	地域の魅力や課題について意見交換しながら「アイデア地図」を作成することで、参加者同士の地域に対する考えを共有
③実態の把握	これまでに挙げられたアイデアと写真を使って「観光資源地図」を作成することで、資源の再発掘と振興策への橋渡し
④アイデア出し	これまでの議論を踏まえた具体的な振興策を、絵と文を使った「観光振興アイデアシート」によって提案とイメージの共有
⑤振興策・実行計画立案	地域全体で取り組む振興策の選択と、「アイデア実行計画表」を作成することで、実現に向けた工程や役割分担の検討
⑥実行部隊立ち上げ	観光振興策を地域全体で実現するために、参加者それぞれの立場が持つノウハウに応じて役割分担し実行部隊を組織
⑦結果の検証	ワークショップ後の活動・状況報告、質疑応答、座談会等によって情報共有と改善策の検討、今後の展開の検討

3.1. ワークショップの事前準備：ファシリテーション

- ・ ファシリテーターの役割

ファシリテーターはあくまでワークショップの中立的な立場による進行役である。そのため、作業のサポートや話し合いを促すにとどめて、ファシリテーター自身が意見やアイデアを出してはならない。アイデアを求められた場合には、参考例をあげてアドバイスをする程度にとど

める。主な役割は作業の説明や、意見の引き出し、時間の経過とともにアイデアをまとめるといったワークショップを適切に進めることである。それと同時に、ファシリテーターにはワークショップによって合意形成を行う上で、参加者全体が平等に話し合えるように場を調節することも必要とされる。

- ・ ワークショップ・ファシリテーターの練習

学生がファシリテーターを務めるにあたって、講師を呼び3回にわたってワークショップ及びファシリテーターの練習を行った。そこでは、以下のことを実践しながら学んだ。

- ・ アイスブレイクの重要性とその方法

参加者がミニゲームをすることで、個々人の緊張を解くとともに参加者同士の距離感も近づき、また場全体も和やかになる。円滑な話し合いを促し効果的なワークショップを行うためにはアイスブレイクが重要である。

- ・ 自己紹介の方法

一般的な自己紹介は利害関係の把握が目的となっているが、ワークショップでは親近感を醸成するための自己紹介が重要である。そのために、自己紹介にも様々な方法がある。

- ・ グループ分けの方法

目的に応じてグルーピングする必要があるため、様々なグルーピング方法とその効果を知っておくことが重要である。

- ・ 参加者を話させるためのテクニック

参加者全員が意見形成に関わるためには、全ての人に意見を述べてもらう必要がある。そのため、話続ける人をとめる技術や話しづらい人に話し出してもらう技術を知ることが重要である。

- ・ 参加者に話を止めて注目してもらうためのテクニック

円滑に進行するには、参加者が作業をやめて司会等に注目してもらう必要がある。そのため、作業を止めて注目を集める技術を知っておくことが重要である。

- ・ 目的ごとによるワークショップの様々な方式

意見抽出やアイデアの創出、合意形成等目的に応じてワークショップの方式を選択することが重要である。

- ・ 工程の構築や備品の準備といった計画の困難さと重要性

目的に応じて適当な方法を選択し組み合わせワークショップを計画しなければならない。また計画では、会場設営といった事前準備や、ワークショップ中の作業の説明、備品を配るなどの作業準備といったところまで細かく時間配分を決めておかなければ円滑に進行できない。他にも、どの作業でどのような備品を使用するのか、またその管理といった計画などもワークショップの成功のために重要な要素である。

これらを踏まえて、模擬ワークショップの計画から実施を行い、確認・改善の上で実際のワークショップの成功を目指した。

3.2. 第一回ワークショップ

3.2.1. 概要

- 日時
2016年9月6日(火) 14:00~17:00
- 場所
由良町役場大会議室
- ファシリテーター
学生：16名
- ワークショップ参加者
由良町関係者：約40名
学生：15名
グループ数：7グループ
- 目的

第一回ワークショップでは、「由良町の観光振興で、実現できたら楽しい皆さんのアイデア」「ワークショップを通じた関係者の良好な関係づくり」をテーマに、参加者同士で意見交換、並びに「アイデア地図」の作成を行う。第一回ワークショップを通じて、参加者同士の交流を深めてもらうとともに、ワークショップでの作業に慣れてもらうことや楽しさに触れてもらうことも目的である。

3.2.2. 進め方

① 事前調査

- 地域の観光資源探し(ワークショップ前日4~5時間)

地域外の視点で観光振興資源となり得るコンテンツを見つけるために、ワークショップに参加する学生が事前調査を行う。26人の学生が各6・7人の4班に分かれて地域内を巡り、魅力を感じた地域資源などをカメラ撮影や取材する。調査は観光タクシーを使って行う。各班に割り振った観光コンテンツを中心に、観光マップを見ながら自由に地域内を探索する。

調査の効果を高めるための準備も重要である。地域の方々に協力してもらい観光コンテンツの解説や案内をしてもらう。飛び込みで話を伺った方から、その日だけでは撮れない写真を後日メールでいただくなどである。

- 学生による「観光資源地図」の作成(1.5時間)

地域外の視点で感じる魅力を地域内の方々と共有するために、事前調査で撮影した写真を使って、班ごとに地域の外から見た「観光資源地図」を作成する。模造紙に写真を貼り付けて、観光客となり得る視点からの地域の姿を示す。「観光資源地図」は、地図形式や観光プラン、観光町づくりなど班ごとに自由にコンテンツをまとめて完成させる。

- 学生による「観光資源地図」の発表(各班5分以内、合計20分)

ワークショップ当日に、各班の代表者が「観光資源地図」をもとに、地域の魅力を地域関係者に発表し、住民にとっては当たり前となっている地域の魅力を共有する。また、地域資源の

例を示すことで、ワークショップでのスムーズな意見交換の呼び水とすることや、地域についての発表をすることで外部者である学生に対して親近感を持ってもらうことも期待する。

「観光資源地図」を発表に使うとき以外は壁に貼っておくことで、ワークショップでの作業のお手本としてもらうとともに、ワークショップ開始前や休憩時間の学生と住民との交流に利用することもできる。

② 課題の明確化

・ 席決め

効果的なワークショップを行うためには、グループに所属する参加者の立場が偏らないようにする必要がある。そこで、住民・観光産業関係者・行政職員・学生の席が固まらないように、事前にそれぞれの立場ごとに座席を決めておく。そして、各立場別に通し番号を付け番号札を用意する。当日、参加者の受付の際に立場別に番号札をランダムに渡し、ファシリテーターの誘導のもと席に着いてもらう。

・ ワークショップ第一部（1回目：10分、2回目：15分、3回目：20分の合計45分）

「由良で実現できたら楽しい観光振興のアイデア」というテーマで、OTM法³のワークショップを行い、参加者同士の地域に対する認識の共有をする。ここでは、様々な意見を出すことが目的であるため、互いに相手の意見を批判しないということが重要である。最初は参加者が緊張していて円滑な意見交換ができないと考えられるため、第一部のワークショップでは軽い雑談のような形から始める。

第一部では、1回目は2人組から始めて、8人グループとなる3回目まで行う。今後はここでできたグループを基本として第三回ワークショップまで進めることになる。最初は一対一の意見交換から始まるため、全ての参加者が意見を述べることができる。そのため、参加者全員の意見を踏まえてアイデアが形成されていくことになるので、住民の考えの共有と住民全体で地域を良くしていくという目的が達成される。

最初の意見交換であるため、今後考えていく観光振興策のためのアイデアの種出しと参加者の交流の段階である。意見交換では、テーマに縛られ過ぎず「この町にどんなものが欲しい」「この町をどうしたいか」「この町の課題は何なのか」など自由に地域についての話題で盛り上がるとよい。

ファシリテーターは会場内を回り、うまく会話が進んでいなければ会話に混ざるなどして意見交換を促す。8人グループになった段階で、各グループに1人が付いて対応する。意見出しが盛り上がり過ぎると意見をまとめていく時間が足りなくなるため、ファシリテーターは段階に応じてグループの作業を適切に導く。

・ ワークショップ第二部：「アイデア地図」⁴の作成（30分）

第一部での様々な意見をもとに、グループごとに地域の良さ・課題・アイデア・実現したい

³ OTM法（累乗型対話手法）とは、最初は近くの人と2人組で意見交換を行い。時間経過に伴って、近くの2人組同士が合流して4人グループとなり再び意見を出し合う。このようにして倍々にグループの人数を増やしながら、意見を出し合っていく方法である。

⁴ 4節にて掲載

ことなどを自由に出し合い、「アイデア地図」にまとめることで、地域の現状認識の共有並びに観光振興策の提案に向けてアイデアを深めていく。また、参加者が地域に対してどのようなことを考えているのか、地域を良くしようと他の人も考えているということを感じ、親近感や一体感を持つていくことも期待する。

第二部では、グループごとに各自カード(付箋紙)に無記名で意見やアイデアを書き出してもらう。1人当たり少なくとも3枚を目安に考えてもらう。全員が書き終えたら、1人ずつ手持ちのカードを読み上げて、テーブルの模造紙に貼り付ける。その際に、似たジャンルや系統のカードを持っている人がいたら、そのカードもまとめて模造紙に貼る。全てのカードを貼り終えたら、類似意見のカードを丸で囲み要約するタイトルやカテゴリーを付ける。次に、各カードのまとまり同士を線で結び関係性を書き込んでいく。最終的にアイデア全体がネット状に相関関係を示した状態にまとまる。全体のタイトルと班番号を記して「アイデア地図」を完成させる。色分けや説明文・イラスト等を添えるとより良い「アイデア地図」となる。

「アイデア地図」を作成する際には、1人がリードして作っていくよりもグループ全員で作りに上げていくのが望ましい。そのためにファシリテーターは、全員が意見を言えるように対応することや、全員がペン持っておくようにして誰でも書き込みやすいようにするなど、グループ全員が協力して完成させたという体験に繋げることが重要である。

- ・ 各グループ発表(各グループ5分以内、合計30分)

完成した「アイデア地図」をもとに代表者が参加者全員に発表し、各グループの考えを共有する。発表者はできるだけ住民にしてもらうことが望ましい。発表後に一番良かったと思うアイデアを学生以外に投票してもらい集計結果を発表することで、地域に求めていることの傾向を掴んでもらう。

- ・ 次回までの宿題

第二回ワークショップで利用するための、観光資源に使えるような写真を住民の方々に撮ってきてもらう。日常生活でも地域の魅力探しやアイデアを考えてもらう機会とする。また、自ら撮った写真を使うため、次回の話し合いのきっかけとしても機能する。

3.2.3. 結果

- ・ 事前調査

ワークショップに参加する学生にとっては、予め学生間で議論する過程を踏むことで地域を深く理解できる。それにより、ワークショップでの地域関係者との意見交換に参加しやすくなる。また、学生の地域に対する熱意を参加者に感じてもらうことで、参加者との良い交流につながることもワークショップの成功にとって重要である。

- ・ 第一回ワークショップ

開始とともに意見効果を促すことが困難であることを想定していたが、実際にはほとんどの参加者が開始とともに積極的に意見交換を始めた。

学生からよそ者の視点の意見を聞くことで、住民の「地域をもっと“知りたい”」を引き出すことができた。また学生が場にいることで、住民から行政職員へのネガティブな意見が出に

くい環境であったと感じた。加えて、お金に関する話題も出にくい環境になり、予算的に難しいというようなマイナスな話よりも“いいね”という話し合いの場の形成としても学生が機能したと考えられる。

OTM法では段階を踏んでグループの人数が増えていくので、普段は話さなそうな人でも話しやすい環境となっていた。そこから「アイデア地図」作成の作業に移り、グループ内で考えを共有していくことで親近感や距離感が近づいていくことや、誰もが意見を出し合うことで「自分の考えを話していいんだ」という場になるため、参加者の“伝えたい”が増幅していったように感じた。そのため、参加者が「こういうアイデアを付け足したらもっと良くなるのでは」「なら私の考えは」と意見を言い合ってアイデアが膨らんでいった。加えて、無難ではない考えも言い合える環境を整えることができた。このようにして、最初は魅力的な場所など単品の話であったのが、アイデアが増えることでピースが組み合わさるように話が具体化していった。

3.3. 第二回ワークショップ

3.3.1. 概要

- ・ 日時
2016年10月28日（金）14:00~17:00
- ・ 場所
由良町役場大会議室
- ・ ファシリテーター
学生：7名
- ・ ワークショップ参加者
由良町関係者：約50名
学生：8名
グループ数：7グループ

- ・ 目的
第二回ワークショップでは、より具体的な観光振興アイデアの抽出を目指す。第一回ワークショップで作成した「アイデア地図」をもとに、実際に観光振興を行うにあたって利用できるような町の「観光資源地図」⁵の作成と、「観光振興アイデアシート」⁶の作成を行う。アイデアから具体的な振興策への橋渡しと、地域全体で実際に行う観光振興策を考えるための練習も目的である。

⁵ 4節にて掲載

⁶ 4節にて掲載

3.3.2. 進め方

③ 実態の把握

- ・ ワークショップ第一部：「観光資源地図」の作成・発表 (40分)

住民に撮影してもらった写真を利用して「観光資源地図」を作成する。それだけでは足りない場合には、事前調査で学生が撮影した写真を各グループに配付する。作業は第一回ワークショップのグループで再び行う。グループごとに前回作成した「アイデア地図」やアイデアの傾向に沿って「観光資源地図」を作成する。前回は踏まえたアイデアと写真をもとに実際に地域にある資源とを組み合わせ、地域の観光振興のためのアイデアをグループ内で共有しながら考えていく。意見交換を通じて、住民が地域の観光資源について再発掘する機会になるとともに、写真を用いることで観光資源の活用方法をより具体的にイメージしながら考えることができる。

これまでと同様に、それぞれの観光資源をどのようにして活用できるかを考えながら、連携させたい資源の写真を丸で囲んだり、線でつなげたり、小見出しを付けるなどして完成させる。完成した「観光資源地図」を代表者が発表し参加者全員でアイデアや地域に対する考えを共有することで、地域全体で観光振興に取り組んでいるということの再確認をする。

④ アイデア出し

- ・ ワークショップ第二部：「観光振興アイデアシート」の作成・発表 (50分)

第二部では、「観光振興で行えそうなアイデアの抽出・ポスターセッション」を行う。参加者はこれまでのワークショップを踏まえて、各自観光振興策をイラストと説明文で複数提案する。「観光資源地図」の段階で写真を組み合わせてまとめているため、アイデアをイラストでイメージしやすくなっている。また、振興策をイラストで表現することで、実現イメージを共有しやすくなる。アイデアシートにはタイトルと発案者の名前も記す。

アイデアシートを書き終えたらグループ内で説明し合い、グループごとに良いと感じた提案を2~4案選ぶ。各グループが選んだアイデアシートを壁に貼り、代表者1人が解説役となり掲示したアイデアシートの前に立って発表する。代表者以外の参加者は貼り出されたアイデアシートを自由に見て回り代表者の説明を聞く。また、適宜質疑応答を交えて参加者全体で振興策の共有をする。解説役は途中で入れ替わってもよい。

- ・ 次回までの宿題

参加者には次回のワークショップで利用するために、これまでのワークショップを踏まえて改めて「観光振興アイデアシート」を書いてきてもらう。今回作成したアイデアシートは主に練習目的であり、第三回ワークショップで提案するものが地域で実現を目指す観光振興策の候補となる。

3.3.3. 結果

第一回ワークショップでの経験があるため、ワークショップが開始した時点で一体感があり話し合いも充実した。それぞれの作業も慣れた手付きでスムーズに取り組みされた。また、学生と住民も開始前からたわいのない雑談ができるような関係となっていた。

議論が深まっていくことでアイデアがより地域に即した内容になっていった。また、様々なアイデアが具体性を持っていくにしたがって参加者の熱意がより高まっていった。

3.4. 第三回ワークショップ

3.4.1. 概要

- ・ 日時
2016年12月9日（金）14:00~17:00
- ・ 場所
由良町役場大会議室
- ・ ファシリテーター
学生：6名
- ・ ワークショップ参加者
由良町関係者：約40名
学生：8名
グループ数：6グループ

- ・ 目的

第三回ワークショップでは、改めて書いてもらった「観光振興アイデアシート」から、地域で実現させたい具体的な観光振興策の絞り込みを行う。その結果をもとに「アイデア実行計画表」⁷を作成して、地域全体で取り組むための現実的な実行計画を考える。また、ワークショップ参加者が連携して実行部隊を結成することを目指す。

3.4.2. 進め方

⑤ 振興策・実行計画立案

- ・ 観光振興策の選択（30分）

第二回ワークショップ後に住民の方々に改めて書いていただいた「観光振興アイデアシート」に学生が提案する案を加えた中から、実現させたい提案を地域関係者の投票によって決定する。まず、アイデアシート作成者が参加者全員に振興策の解説を行う。次に、アイデアシートを壁に貼り出して、参加者は自由に見て回りアイデアシートを詳しく確認する。その上で、学生以外の参加者は実際に取り組みたい案を3つ選び、1~3位の順位を付けて投票する。1位：3点、2位：2点、3位：1点として合計点の上位8案を決める。

ファシリテーターが即時集計して結果を発表する。

- ・ 「アイデア実行計画表」の作成（40分）

観光振興策の実行に向けて、選ばれた8案について難易度、緊急度、役割分担、着手順を検討していく。難易度は、A：難しい、B：普通、C：優しいの3段階で評価する。緊急度は、1

⁷ 4節にて掲載

年以内に実現する、2~3年以内に実現する、4~5年以内に実現するの3項目から選択する。役割分担は、住民が実施する、住民・行政協働で実施する、行政が実施するの3項目から選択する。着手順位は、8案の優先順位の高い案から1~8位を決める。

グループごとに話し合いながら、実行計画表作成する。実行計画表の記入する際は、工程や実現性について実行することを想定して意見交換をしてもらう。地域に関わるそれぞれの立場のできることでできないことを確認しながら、実現に向けた計画を検討する。

ファシリテーターが完成した実行計画表を回収し、集計してその結果を全体に発表する。この段階での目的は、実際に地域の関係者自らが振興策を執り行うことを想定してもらうことである。よって、グループ内で意見を共有するというよりも、参加者全体で共有し地域全体様々な立場で設計図づくりをしていくことが必要である。そのため、集計ではグループごとの意見が分かれていても、平均を取るのではなくどちらか納得し得る意見を採用することとした。集計結果は即時ファシリテーターによって発表する。

最終的な「アイデア実行計画表」が参加者全体の総意として受け入れられることが望ましい。

⑥ 実行部隊立ち上げ

- ・ 懇親会

これまでのワークショップを踏まえて、今後実際に観光振興に乗り出してもらうための意見交換の場である。「アイデア実行計画表」に基づいて、住民・観光産業関係者・行政それぞれの立場や能力によって何ができるのかを話し合い、実行部隊が形成されることや決起集会となることを期待する。

3.4.3. 結果

- ・ 第三回ワークショップ

これまでとは違ったワークショップの作業であったがスムーズに進行していった。また、テーマもこれまでのアイデア出しと違い振興策の選択とその実行計画であるため、ワークショップ中の雰囲気も楽しみながら盛り上がるというよりは、真剣味をもって取り組む様子であった。観光振興アイデアシートは17案提出された。

- ・ 懇親会

実行部隊を組織されたり実施計画を詰めたりの議論の場となることを期待していたが、実際にはそうはならなかった。予定されていたワークショップの最終回ということもあり、学生と地域住民を交えてこれまでの活動を振り返りながら話し合うにとどまった。このまま学生に観光振興も実現してもらいたいという話題が出るなど、内容に関しても期待していた通りにはならなかった。

3.5. フォローアップワークショップ

3.5.1. 概要

- ・ 日時
2017年8月9日（水）14:00~17:00
- ・ 場所
白崎海洋公園内会議室
- ・ ファシリテーター（座談会形式なため実際の役割は司会進行である）
学生：7名
- ・ ワークショップ参加者
由良町関係者：約15名

・ 目的

フォローアップワークショップでは、過去三回のワークショップを振り返りつつ、地域の観光振興に対して主体的に動いている方々と意見交換を行う。ワークショップを行う前から地域がどのように変化したのか、どのような影響を及ぼしたのかなどを、様々な側面から考察し今後の展開を考える。また、今後の解決すべき問題や学生としての活動への関わり方について検討することも目的である。

3.5.2. 進め方

- ・ 振り返り（15分）

フォローアップワークショップの目的の1つが、過去三回のワークショップの効果の検証であるため、意見交換の前にこれまでの活動を振り返る必要がある。前回（第三回WS）より約半年の開きがあるため、思い出しかねて学生によるプレゼンテーションによって、ワークショップの目的、第一回から第三回の作業内容・提案されたアイデアの傾向分析結果・アンケート分析結果からみる参加者の意識の変化などを説明する。また、これまで作成してきたアイデア地図、観光資源地図、実行計画表も参考資料として配付する。

⑦ 結果の検証

- ・ 現状報告発表・議論（1時間40分、発表は1人当たり5分程度）

フォローアップワークショップでは、これまでのような作業は行わず参加者によるプレゼンテーションと座談会形式による意見交換を行う。実際に観光振興を目的とした活動を行っている方を中心に集まっただき、その内数名にプレゼンテーションをしてもらう。予めスライドを用意してもらった上で、それぞれの立場でこれまでの活動内容や今後の予定、現在抱えている課題などを5分程度で発表してもらう。発表後は席について参加者全員でそれぞれの活動に対して質疑応答や意見交換を行う。

ここでは、これまでのワークショップの効果の検証や学生としての役割・関わり方の検証も目的であるため、ファシリテーターも積極的に議論に参加する。

- ・ 今後についての議論 (40分)

各活動報告と議論による情報共有上で、今後地域全体としてどのように取り組んでいくのかについて議論を行う。参加者それぞれの立場でできることを言い合い、連携していくことで課題の解決となることを期待する。

3.5.3. 結果

活動報告による情報共有という部分はいまうまく機能したが、各活動に対して議論を交えて連携体制を構築するまでには至らなかった。

ワークショップの今後の展開としては、由良町DMOを立ち上げることが決まっているので、そちらに引き継がれていくことになる。したがって、各活動に対する組織形成とはならなかったが、地域全体で観光振興に取り組むための組織作りには影響を与えたと言える。

3.6. まとめ

- ・ 学生ファシリテーターの意義

ファシリテーターは参加者の間に立つ役割でもあるため、学生の親しみやすさがワークショップの潤滑剤として十分機能した。参加者は中年以上の人が多くなるため、学生の若者としての面が話を引き出すことにもつながった。学生として準備や勉強といった真面目さや熱心さの部分で、熱意を感じてもらい真剣な議論を促すことに影響した。

また、産官学民という様々な立場が関わってワークショップを行うためにも、若い住民との違いを出せていると考える。ワークショップの成功には、様々な事前学習や準備が必要ということも述べた。しかし、本業の活動もある地域関係者がこれに取り組むことは困難である。そこで、学生がワークショップの学習や地域との関わりを通じて、課題解決のための考察や活動といったことの学びにつなげることで、学生本来の目的に沿った上でこの活動に参加することができる。住民はワークショップに参加して本来の目的である地域振興を実現しつつ、ワークショップのノウハウも得ることができる。このようにして、効率的にワークショップを引き継ぐことで、持続可能な活動となると考える。

4. ワークショップによる観光振興策実現に向けた効果の分析

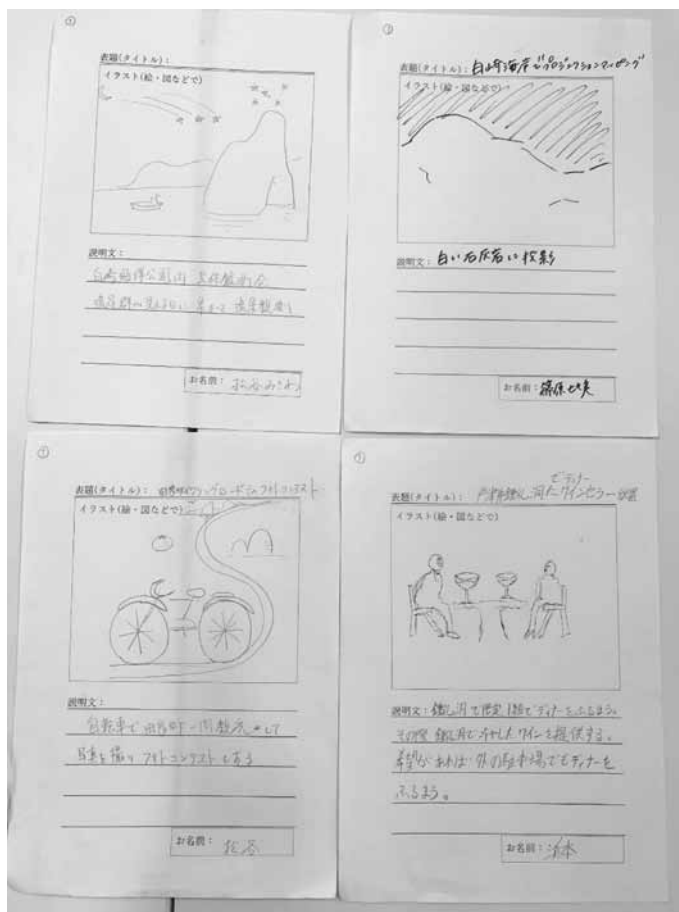
- ・ アイデア形成の過程：1班を例として

第一回ワークショップから第三回ワークショップによる振興策形成への効果・影響をみるために1班のアイデアについて検討していく。

第一回のアイデア地図では、PR手段とPR対象に関するカードを中央に置いている。左側に由良町の成功例と改善すべき点を具体的に挙げている。右側では由良町に実際にあるアクティビティの例を挙げていて、PRと組み合わせることを示している。また、主に海に関するアクティビティと海の食材とを組み合わせることも示している。

PRでは、SNSを中心としたPR手段とインバウンドといったPR対象について挙げている。

第二回 WS 「観光振興アイデアシート」：1 班



アイデアであったのが、地元でとれた魚のお鍋やシラス丼というように具体例が挙がるようになった。また、個別の観光コンテンツとしてのアイデアだったものが、組み合わせあって「(修学旅行)体験メニュー」という観光プランのアイデアとなっているものもある。

写真によって前回なかったアイデアが生まれていることもあれば、逆になくなったアイデアもある。取捨選択によってなくなったのはもちろん議論が深まった結果であるが、特に大型船・海上自衛隊の見学は写真が無いことによって削られてしまったのではないかと推測する。前回の内容に応じた写真を用意しておくことで、より良いアイデア形成につながる可能性がある。

「白崎海洋公園内天体観測会」について注目すると、第一回のアイデア地図では白崎海洋公園は単体で挙げられており、第二回の観光資源地図では白崎海洋公園展望台からの風景写真とともに「夕日百選」「星空もきれい」というコメントが添えられている。これまでのワークショップによってこの提案が形成されていったことがうかがえる。

「戸津井鍾乳洞でディナー」について注目すると、第一回のアイデア地図の段階でアクティ

ビティとグルメを組み合わせると示されている。また、アクティビティのカテゴリーでは、資源の1つとして戸津井鍾乳洞が挙げられているとともに、今までとは変わった活用をしたいという意見も挙げられている。戸津井レストランというアイデアもこの段階で挙げられている。第二回の観光資源地図の段階になると、今までとは変わった活用として戸津井鍾乳洞と興国寺の2つがアクティビティの中から選ばれている。このように議論の中でグルメと組み合わせたり、また戸津井レストランという要素も加わってこの提案がなされたと考えられる。

・ 実行計画について

これまでの活動の結果として、参加者全体で取り組み完成した地域の観光振興策の実行計画について検討していく。

第三回 WS「アイデア実行計画表」：全グループの集計結果

順位	アイデア項目	難易度	緊急度			分担			着手順
			早く	普通	ゆっくり	住民	協働	行政	
			1年以内	2~3年以内	4~5年以内				
1	グランピューラ	B	○		○		○		2
2	観光タクシー	C	○				○		1
3	複合型リゾート施設	B			○		○		6
4	ムーンライトクルーズ	C	○			○			5
5	本格的地底探検！ 「戸津井鍾乳洞、暗転！」	C	○				○		3
6	星空観察教室 in 白崎海洋公園	C	○			○			4
7	聖地巡礼	A	○		○	○			8
8	新たなゆらツアーの開拓	B		○			○		7

選ばれた観光振興策は観光資源を複合的に活用した提案と、観光資源を今すぐ活用しようとする提案に分かれた。難易度の項目では、複合的な案の難易度がBと高く、資源単体での活用案はCと低くなっている。緊急度の項目で「グランピューラ」に○が2つ付けられているのは、とりあえず始めてみようという考えと、理想的な形態となるのには時間がかかるという考えのもとである。難易度の低い案が早く取り組むという結果となった。実現主体を選ぶ分担の項目では、提案が観光事業ということもあるが行政単独で実施する案は1つも出なかった。着手順の項目では、「グランピューラ」の難易度を低いとした班では着手順を上位に、難易度を高いとした班では着手順が中位としていた。他の案に関しては全班で同様の傾向であった。

2位の「観光タクシー」についてみていく。観光タクシーは多くの参加者が認識している交通インフラの課題の解決策でもあり着手順が1位となっている。タクシーツアーの企画は進められており、第三回ワークショップの後に7名の学生がモニターツアーに参加した。モニターツアーでは、白崎クルーズや海蛍鑑賞、水産物加工体験といった体験型コンテンツ、興国寺や

戸津井鍾乳洞といった観光資源などを語り部の案内のもと巡った。戸津井鍾乳洞では、5位の「本格的地底探検！戸津井鍾乳洞、暗転！」を行うなど、ワークショップ内で挙げられている他のアイデアも取り込まれている。語り部ツアーや海蛸鑑賞もワークショップ内で提案されたアイデアである。また宿泊先は、グランピューラで利用が想定されている白崎海洋公園内のログハウスを利用した。

このようにワークショップを通じて形成されていったアイデアが実現に向けて既に取り組みられている。

5. まとめ

本論文では、観光振興による地域活性化を実現するために必要な地域観光事業者及び地域住民の理解・協力を得るため、さらに観光という地域外部者の視点を加えるために、従来の利害関係者のみで実施される住民WSの枠を超えて、地域と連携する大学の学生を加えた拡大住民WSの効果を検討、考察した。結果として、そのような住民WSは、住民の観光施策への積極的な理解を誘発させ、住民同士や観光事業者同士の相互理解を深めることが確認された。特に外部者たる大学生の参加により、地域住民が地元に対して新たな気づきをもたらし、施策への理解や積極性を誘発させる点については、従来の利害関係者のみのWSと一線を画する性質をもつものと評価できるだろう。また、アイデア抽出の面でも、住民からのアイデアだけでなく学生からのアイデアを比較検討することを通じて、客観的なアイデアづくりが可能となっている。

今回実施したWSは大学生といういわば「若者目線」での働きかけだったが、観光という面では世代を問わない外部者の参加が求められるかもしれない。特に、地域DMOを発足させ地域型観光を志向する由良町の場合、旅行者ニーズに合わせた着地型観光プランの提示をする上でも、そういった商品の需要者たる外部者の意見を積極的に取り入れる場として、このような拡大住民WSを行うことは重要だろう。

ただし、このような取り組みは今回初めて実施したということで、第3節に挙げたような様々な問題点や課題点がある。特に、事業の実行部隊の立ち上げ及びその後のフォローアップや確認作業について、方法の見直しが必要だろう。その他細かい見直しも含めて、今後も地域と連携した研究活動を実施していきたい。

謝辞

本論文の作成、及び住民WSの実施にあたり、まずWS参加者各位に感謝申し上げるとともに、和歌山県由良町役場産業建設課及び総務政策課の方々には大変お世話になりました。また、大学連携として、前摂南大学地域連携センター（現摂南大学研究支援・社会連携センター）の方々にも、由良町との連携や学生への便宜等において大変お世話になりました。特に、由良町役場産業建設課の数見泰三氏には、各回の参加者募集やWS開催準備など住民WS全般にわたりご尽力いただきました。この場を借りて感謝の意を表したいと思います。

参考文献

- 山浦晴男 (2015) 『地域再生入門寄りあいワークショップの力』 ちくま新書
- 錦澤滋雄・平野史健・原科幸彦 (2000) 「まちづくりワークショップの合意形成機能に関する研究 鎌倉市都市計画マスタープラン策定過程に着目して」 (『都市計画論文集』 Vol.35)
- 平田京子 (2011年) 「共助力向上をめざした防災コミュニティ構築のための研究—文京区町会にみる交流状況と防災訓練の現状—」 (『日本女子大学紀要 家政学部』 第58号)
- 金度源・吉田暉・大窪健之・林倫子 (2015年) 「重要伝統的建造物群保存地区における大字間の相互支援防災計画の検討方法に関する研究—兵庫県篠山市福住における住民防災ワークショップを通じて—」 (『歴史都市防災論文集』 Vol.9)
- 宮田雅大・大窪健之・金度源・林倫子 (2016年) 「防災活動への合意形成を目指した住民ワークショップ手法に関する研究—京都府与謝野町加悦重伝建地区を対象として—」 (『歴史都市防災論文集』 Vol.10)
- 園田千佳・坂本慧介・石川幹子 (2013年) 「復興まちづくりの計画策定プロセスにおける住民ワークショップの役割に関する研究—宮城県岩沼市における復興まちづくりを通して—」 (『都市計画論文集』 Vol.45)
- 平山文則, 越世晨 (2013年) 「地域コミュニティ施設の基本計画支援ワークショップ手法に関する研究 ケーススタディ: 愛知県日進市を事例として」 (『九州大学大学院人間環境学研究院紀要,』 第24号)
- 原悠樹・稲葉佳之・横山夏来・本迫晋・巖網林 (2008年) 「住民ワークショップによる地域協働まちづくり活動支援と地域情報整備」 (『地理情報システム学会講演論文集』 Vol.17)

参考資料

参考資料 1：第一回ワークショップ進行表

番号	時間	概要	担当	目的	進行
1	14:00(5分)	開会挨拶	司会進行	ワークショップ開催についての挨拶、御礼	
2	14:05(20分)	学生による観光資源地図の発表	各班代表	外部の視点からの地域の魅力や資源を発表しを共有する	本文参照
3	14:25(5分)	アイスブレイク	司会進行	参加者の緊張を解き意見交換がスムーズに進むようにする	簡単なゲームを行う
4	14:30(10分)	ワークショップの進行説明	司会進行	ワークショップの目的と進め方や意見交換の方法を解説する	簡潔かつ参加者が戸惑わないように説明する 質問があれば応答またはファシリテーターが対応
5	14:40(45分)	ワークショップ第一部	グループ	OMT法による、由良町観光振興のアイデアを出し合う	本文参照
6	15:25(10分)	休憩			
7	15:35(25分)	ワークショップ第二部	グループ	グループで考えを共有するとともに、アイデア地図にまとめる	本文参照
8	16:00(30分)	各グループ発表	グループ	まとめたアイデア地図を発表し、参加者全体で共有する	本文参照
9	16:30(10分)	次回ワークショップの説明	司会進行	次回ワークショップの内容とそれまでの活動を説明する	次回のWS開催の日時、おおよかな内容を解説 また参加者側に準備が必要であればその解説
10	16:40(10分)	ワークショップのアンケート		今回の感想を聞き、次回までに改善する	アンケートを配布し、回収。集計は後日
11	16:50(10分)	閉会挨拶	司会進行	本日参加のお礼並びに、閉会の言葉	
12	17:00	第一回ワークショップ終了			

参考資料 2: 第二回ワークショップ進行表

番号	時間	概要	担当	目的	進行
1	14:00(10分)	開会挨拶	司会進行	ワークショップ開催についての挨拶、御礼と前回の振り返り	第一回ワークショップの様子を紹介する
2	14:10(10分)	ワークショップ第一部の進行説明	司会進行	第一部で行うワークショップの目的と形式を理解してもらい、より良い意見交換とアイデアの提案を目指す	第一部で行うワークショップの目的と形式を説明する わからないことは適宜ファシリテーターが対応する
3	14:20(40分)	ワークショップ第一部	グループ	地域資源の写真を使って観光資源地図を作成することで、観光資源の理解と活用アイデアを共有する	本文参照
4	15:00(20分)	学生によるプレゼンテーション	学生	学生の研究活動報告	プレゼンテーションを行う
5	15:20(10分)	休憩			
6	15:30(10分)	ワークショップ第二部の進行説明	司会進行	第二部で行うワークショップの目的と形式を理解してもらい、より良い意見交換とアイデアの提案を目指す	第二部で行うワークショップの目的と形式を説明する わからないことは適宜ファシリテーターが対応する
7	15:40(20分)	ワークショップ第二部	グループ	観光振興アイデアを参加者に提案してもらう	本文参照
8	16:00(30分)	各グループ発表	代表者	ポスターセッションにより、参加者全体で共有する	本文参照
9	16:30(10分)	次回ワークショップの説明	司会進行	次回ワークショップの内容とそれまでの活動を説明する	次回のWS開催の日時、おおまかな内容を解説。 また参加者側に準備が必要であればその解説。
10	16:40(10分)	ワークショップのアンケート		今回の感想を聞き、次回までに改善する	アンケートを配布し、回収。集計は後日
11	16:50(10分)	閉会挨拶	司会進行	本日参加のお礼並びに、閉会の言葉	
12	17:00	第二回ワークショップ終了			

参考資料 8：第三回ワークショップ進行表

番号	時間	概要	担当	目的	進行
1	14:00(10分)	開会挨拶	司会進行	ワークショップ開催についての挨拶、御礼と振り返り	これまでのワークショップの様子を紹介する
2	14:10(10分)	ワークショップ第一部の進行説明	司会進行	第一部で行うワークショップの目的と作業内容の理解	第一部で行うワークショップの目的と形式を説明する わからないことは適宜ファシリテーターが対応する
3	14:20(30分)	ワークショップ第一部	各参加者	観光振興アイデアシートによる提案の共有 地域全体で取り組むことを目指す提案を運ぶ	本文参照
4	14:50(10分)	休憩			ファシリテーターが投票結果を集計する
5	15:00(10分)	ワークショップ第二部の進行説明	司会進行	第二部で行うワークショップの目的と形式理解してもらい、 より良い意見交換とアイデアの提案を目指す	第二部で行うワークショップの形式と目的を説明する わからないことは適宜ファシリテーターが対応する
6	15:10(40分)	ワークショップ第二部	グループ	これまでのワークショップを通じて提案された観光振興策を、 地域全体で実行するための計画を立てる	本文参照
7	15:50(10分)	休憩			ファシリテーターが集計する
8	16:00(40分)	懇親会		集計結果の発表 観光振興策の実行を目指した意見交換	本文参照
9	16:40(10分)	ワークショップのアンケート		今回の感想を聞き、今後の活動を検討する	アンケートを配布し、回収。集計は後日
10	16:50(10分)	閉会挨拶	司会進行	本日参加のお礼並びに、閉会の言葉	
11	17:00	第三回ワークショップ終了			

参考資料 4：フオロアアップワークショップ進行表

番号	時間	概要	担当	目的	進行
1	14:00(5分)	開会挨拶	司会進行	ワークショップ開催についての挨拶、御礼	
2	14:05 (15分)	これまでのワークショップの振り返り	学生	過去三回のワークショップの内容の復習	学生によるプレゼンテーション
3	14:20 (50分)	現状報告発表・質疑応答(1)	各参加者	ワークショップ開催後の活動内容の情報共有 また、それぞれの活用についての意見交換	本文参照
4	15:10 (10分)	休憩			
5	15:20 (50分)	現状報告発表・質疑応答(2)	司会進行	ワークショップ開催後の活動内容の情報共有 また、それぞれの活用についての意見交換	本文参照
6	16:10 (40分)	今後についての議論	グループ	地域振興の課題点・問題点を把握し、 どのように取り組んでいくのかを確認する	本文参照
7	16:50 (10分)	閉会挨拶	司会進行	本日参加のお礼並びに、閉会の言葉	
8	17:00	第一回ワークショップ終了			